

ているか、ということが問われなければならない。

ここには、体育学の水準とかかわった大きな問題がある、と思う。第二は、スポーツ習得過程の在り方とりわけ大学運動部の在り方が問われなければならない。体育教師の多くは、何らかのかたちでスポーツを習得してきており、大学で運動部生活を送ってきたものは多い。そしてこの生活が、彼等のスポーツ観、ひいては人生観の形成に決定的ともいえる影響を与えているからである。

2. 学校の管理主義化

次に問われなければならないのは、今日急速に進行した学校の管理主義化とその下での体育教師の姿である。その第一は、多くの学校で「生活指導」の中心に体育教師がたたさされているという現実がある。「生活指導」は、本来学校全体でなされるべきであるのに、体育教師が前に据えられているのである。体罰が肯定される管理主義教育の下にあって、体育教師が目されるのは、いわば当然である。その意味では、管理主義教育の犠牲者である。第二に、一方では、最も具体的に学校での位置と「榮譽」を獲得できること、つまりクラブを強くして、名を上げることに生き甲斐を見出していく体育教師がふえている。学校の「榮譽」と勝利至上主義と体罰と体育教師がこうして一つの鎖につながれることになる。

3. 大学運動部の在り方の問題

とはいうものの、「体罰・しごき-いじめ」の“担い手”となっているような体育教師に決定的な影響を与えているのは、彼等の若き血を注いだ大学運動部の在り方であろう。そこで、大学運動部の民主主義を破壊し、人間の尊厳をふみにじっている諸契機とそれらの相互関係が問われなければならない。私は、それをつぎの3つの契機ととらえている。①上下の人間関係、②暴力と抑圧、③勝つことの神格化。これらの有機的関係を持った構造としてとらえることができる。(詳しくは、拙稿「スポーツと民主主義」『体育原理講義』1987年、大修館)

次に、この構造を補強しているものに、部員が集団で生活する寮生活がある。このことを通じて上記のことは、生活の隅々まで貫徹していくのである。

鎖を断切る弱い環はどこにあるのであろうか。

2. 社会とスポーツ・スポーツ運動

(第2グループ)

バイエルン州スポーツ連盟(BLSV)の
成立過程(1945.4.30~1947.8.3)

—ミュンヘン・バイエルンにおける
戦後初期スポーツ改革の成果と限界—

86.9.16 高津 勝

一、先行研究の整理

シュトリッヒは、BLSVの設立とその組織的特徴・活動を次のように特徴づけている。①占領国アメリカの寛大さによる急速なスポーツの展開・組織化の典型的一事例、②中間的な統括団体ではなく、地域クラブを州連盟の直接の構成員とすることによる、民主主義的な組織構造、③スポーツ分野における諸潮流(四派)の統一強化をめざすための決議・執行機関の四派同権的構成、④種目別統括組織の専門性や財政的自立性を認知しつつも、それらをBLSVに(一部門として)統括する、⑤団結と統一を意図して生れたこの組織構造を西側占領地区のほぼ全ての州スポーツ連盟が受け継ぎ、ノルトライン・ヴェストファーレンと南バーデンのみが異なる見解を貫いた。

次に、ヴォネベルガーの見解を要約しておこう。①SDPとKPDが共同したところでは良い成果があがった。両党の組織統一のための統一行動や合意は、スポーツにおける共同闘争の基礎を表わす。②多くの地域で、最初は個々の労働者スポーツ組織が再建され、後に、たいていは統一スポーツ運動へと発展していった。その理念は、「宗教や階級によって分裂することのない、統一的で自由なスポーツ運動」、スポーツの統一は、「平和、民主主義、諸国民の相互理解の精神で創設」すべ

きだとするものであった。③この方向は、東ドイツと合致していた。それぞれの州でスポーツ役員が指導組織結成のために会した時、旧労働者スポーツマンは、最初から、以前存在したスポーツ諸組織のなかの民主的な考えをもつ代表者たちと協力した。そうした努力のなかから、やがて各州のスポーツ連盟が設立されたのである。④BLSVは、その原理を規約第23条に結実させ、四派同数による役員構成を打ち立てた。⑤だが、西側占領区においては、民主勢力の活動は、多くのSPD役員によって妨げられた。

最後に、ニッチュの見解を要約しておこう。

①すでに45年夏から、まず自発的に組織されたスポーツ活動が始まり、まもなく、全ゾーンにおいてより確固とした組織形態で活動するようになるが、そのイニシアティブは例外なく旧労働者スポーツマンが取った。②スポーツ分野においては、ヴァイマル期の分裂を再び許すまいとする考えから、戦後直後の数カ月で統一理念＝基本原則が確立した。③旧労働者スポーツマンの指導により、1945年、BLSVに示されるような、組織的には戦前の労働者トゥルネン・スポーツ連盟(ATSB)をモデルとする統一スポーツ運動が登場した。④BLSVにはKPDに近い赤色スポーツ運動も結集し、規約では戦前の4つのスポーツ運動が同権で共同することになった。⑤統一スポーツ運動の思想は、当時、労働者階級、宗教者、政党間で行なわれていた統一労組運動、CDC結成、FDPなどに現われていた全般的な統一のための論議と結びついていた。

二、再検討の視点

先行研究の記述によつて、BLSVの民主的統一スポーツ運動・組織としての戦後初期西ドイツスポーツにおける原型性・典型性は明白である。とりわけ、際立った特徴として、統一戦線的性格と組織構造・役員構成における民主主義的性格を挙げることができよう。では、そのような特徴は如何なる歴史的条件のもとで、どのような諸主体によって生み出されたのか。如何なる歴史的制約

が存在したのか。法則的・主体的歴史認識を深めるためには、そうした問に答えねばなるまい。

まず第1に、戦後スポーツの歴史的前提としての、ファシズム支配と戦争がドイツスポーツにもたらした諸結果、ダメージを把握すること。すなわち、施設・用具の破壊・損傷。スポーツ関係者の戦死・負傷。ナチによる左・右両翼の労働者スポーツマンの弾圧とその組織の解体、財産没収。ナチのスポーツ教義の浸透等。(これについては、ヴォネベルガー『ドイツ身体文化史』第4巻、参照)。第2に、それとかかわって、戦後初期スポーツ運動を規定する2つの作用因をふまえること。すなわち、1)戦争集結の形態・要因(降伏時に国家崩壊、NS支配下、全国的組織勢力としての反ナチ抵抗運動は破滅、戦後ドイツの全国的政治指導勢力不在)に規定されたスポーツ分野における反ファシズム・反軍国主義・民主勢力の力量と所在、2)初期占領形態・目的(分割当時、直接軍事占領、非軍事化・民主化、東西対立の顕在化)と連合、とりわけ合衆国の対独スポーツ政策の作用、である。

三、バイエルン・ミュンヘンのスポーツ運動 ＝1945～46年の可能性

45年～46年には、戦後スポーツ改革をめぐる、住民のなかに次の4つの潮流・可能性を摘出することができるが、同時にそこには後述するような否定的要因も存在した。

(1) 4つの可能性(①②③④)

①自生的反ファシズム勢力と結合し、社会改革と連動しつつ、スポーツ要求を実現して行く「大衆的反ファシズム・スポーツ運動」。

敗戦直前から、主要都市を中心に、ドイツ各地で反ファシズム組織・運動が存在し、敗戦後急速・広範に台頭しつつあった。それらの組織は自主開放を成し遂げるための決定的な契機とはならなかったが、バイエルンでは、バイエルン解放行動、自由ドイツ国民委員会・バイエルン州委員会、“07”等が存在した。それらのうち、例えばミュンヘン近郊のダッハウを中心として活動した自由ド

イツ国民委員会・バイエルン州委員会は、46年6月25日の呼びかけ（「反ファシズム、民主ドイツ建設のために」）で、反ファシズムを貫徹させる目標として、自由・民主・人民共和国、自主管理、反ナチ、自由・民主を基礎とする学校改革、集会・結社の自由、国家による労働力・原料の友好的活用のための一定の計画化と重工業・銀行・大土地所有（ファシズムの基盤）の固有化等とともに、「解散させられた消費者団体、スポーツクラブ、福祉施設等の共益団体の再許可とその財産の返還」を掲げていた。

②SPDとKPDの連合・統一、つまり労働者階級の政治的統一を基礎とし、それに指導されつつ、広範な国民を結集する「反ファシズム人民スポーツ運動としての統一スポーツ運動」。

45年6月11日、KPDは、ベルリンで10項目の緊急課題を全国民に呼びかけ、この月、ライプチヒの旧赤色スポーツ統一のための闘争委員会の指導者は、公開書簡で反ファシズム人民スポーツ運動、統一スポーツ運動を提唱した。ミュンヘンでは、45年8月8日、ソ連占領区と類似したSPD・KPD連合が成立、統一行動が企画された（46年1月4日、SPDは連合を破棄）。

③「ミュンヘン労働者スポーツカルテル委員会覚書」（1945.6.21）に見られる、旧ATSB系の指導する「否ファシズム（ファシズムを認めない）・政治的中立の統一スポーツ運動」。「覚書」の要点は、1)全スポーツクラブの同一スポーツ団体への加入。2)民族社会主義体育連盟（NSRL）傘下クラブの存続。だが、純粋にNS精神を特徴とするクラブの解散。3)33年にナチによって禁止されたスポーツクラブの活動再開。4)スポーツの、あらゆる政治的・世界観的論議からの完全な中立・自由。5)クラブ・スポーツ行事における党政治的、宗教-世界観的論議または宣伝の原則的禁止、等。

④戦前の、いわゆるブルジョワ・スポーツ運動の利益を代表する「ゼードルマイア-案」（1945.6.18）の方向。すなわち、人種・出自による差別撤廃、自由選挙による非ナチのクラブ指導部選出、公的補助否定・自主財政の「非ナチ（ナチでない）

の、非政治的、自由主義的スポーツ運動」。

(2) 4つの否定的要因 (①②③④)

①ドイツ国民は、自力でNS体制を打破しえなかったし、世界制覇を試みたファシズム権力の軍事的崩壊に重要な貢献をなしえなかった。NS体制は、労働者階級の抵抗を根絶することはできなかったけれども、国内の抵抗運動の主体は小集団か個人的抵抗であり、大衆的な運動としては展開しなかった。それゆえ、戦後改革のための主体の成熟、政策的・組織的準備は不十分であった。

例えば、自由ドイツ国民委員会・バイエルン委員会の場合、そのスポーツ要求は1933年以降に弾圧と収奪を受けたクラブの権利回復・活動再開が主眼であって、バイエルン・スポーツ全体を視野に納めておらず、政策的にも未熟であった。

②JCS 1067（45年4月26日、米議会可決、5月10日、トルーマン承認）にもとづき、米占領軍によって自生的反ファシズム組織・運動は解体された。それらの組織は、5月16日に解体されており、例えば自由ドイツ国民委員会-バイエルン委員会の場合、呼びかけを出した6月5日には、すでに活動のピークを迎えていた。

③西側占領区では、ソ連占領区におけるようなSPDとKPDの統一によるSEDの創設という政治編成は失敗し、①で述べたことともかかわって、労働者政党の統一は実現せず、逆にSPDとKPD、とりわけ後者は議会選挙において急速に退潮していった。ミュンヘンでは46年1月4日、SPDがKPDとの連合を破棄、この月おこなわれたバイエルン地方議会では保守諸党派が大多数を制した（SPDとKPDを合せた得票率は、わずか19%）。

④合衆国バイエルン州軍政府（OMGB）の政治と文化・スポーツの分離を前提とした「非政治的スポーツ」政策（これについては、機会を改めて検討したい）。

四、BLSV成立期の

スポーツ運動とその所産
以下、4点に渡って特徴を述べておこう。

第1に、成立過程をめぐる特徴。BLSVは、45年7月18日に設立され、46年6月21日に軍政府によって許可され、47年8月2～3日に第1回定期総会を行なった。上述した4つの可能性・潮流と否定的諸要因が織りなすベクトルの中で、BLSVは二の(1)で述べた③と④の潮流を基礎にしつつ、より具体的には④を量的な主流とし、組織的には③のイニシアティブのもと、ミュンヘン市当局、バイエルン州文化省の了解と軍政府の指導・承認のもとに成立した。

第2に、組織上、活動上の基本的な性格規定をめぐる特徴については、①全州規模の単一の統一のスポーツ統括組織を標ぼうした。従って、それ以外のスポーツ組織を認めず。

②地域クラブの州連盟への直接加盟制を採用し、組織を構成する基礎組織として位置づけるとともに、それによって構成される連盟のなかに種目別諸組織を「部門」として統合し、それらの種目的特殊性に関する自治と財政的自立性を認めた。

③党政治的・宗教的、世界観的中立性の確保。

④役員構成における戦前4派の同権を承認。

⑤余暇活動＝アマチュア・スポーツ組織としての性格づけ（スポーツは身体鍛錬や喜びを価値とする余暇・休養の設計者、従ってスポーツの大衆性、体育的・教育的性格の尊重。オリンピック理念支持とプロスポーツへの否定的対応）。

⑥反ファシズムと民主主義的生活の擁護を標ぼう。

⑦統一と統制をめぐる問題。つまり、前者の重要視による後者の機能の強調と私的自治・自由の保障の問題化。

第3。BLSVの基礎組織としては、ナチ期のスポーツ制度・組織の構成要素であった既存のスポーツクラブの存在が前提とされていた（「労働者スポーツカルテル覚書」）。それらのクラブによる競技網の再建を軸として、急速にスポーツ活動が復活する。そうした活動を包摂するためには、非ナチ化の追及による分裂を回避し、「統一」を確保せねばならなかった。「非ナチ化・非軍事化・民主化」と「全スポーツ界の統一と団結」という

アポリアは未解決となり、非ナチ化の徹底を介した新スポーツ組織の建設という点では不十分さを残した。

第4。「統一スポーツ運動」は、ナチ期のスポーツおよびそれを阻止することができなかったヴァイマル期のスポーツに対する反省と新ドイツ建設へのこの時期の国民的願望を反映するものであったが、反ファシズム勢力・運動と提携し、社会改革を視野に入れたスポーツ改革を進められなかった。スポーツ運動における「党政治的中立性」と「自由で民主的な社会・国家建設」の関連性については、理論的・実践的に未解決であった。

<主な文献・資料>

- (1) Strych, E.: Der westdeutsche sport in der Phase der Neugründung 1945-1950, Schorndorf bei Stuttgart 1975.
- (2) Wonneberger, G. (Hrsg.): Geschichte der Körperkultur in Deutschland 1945-1961, Bd. IV, Berlin(Ost) 1967.
- (3) Nisch, F.: Die Organisation des Sports in Deutschland 1945-1974, in Olympische Jugend, Jg. 19(1974) H. 7.
- (4) Institut f. Marxismus-Leninismus beim Zentralkomitee der Sozialistischen Einheitspartei Deutschland (Hrsg.): Dokumente und Materialien zur Geschichte der Deutschen Arbeiterbewegung, III. Bd. 1, Berlin(Ost) 1959.
- (5) Niethammer, Lutz u. a. (Hrsg.): Arbeiterinitiative 1945-Antifaschistische Ausschüsse und Reorganisation der Arbeiterbewegung in Deutschland, Wuppertal 1976.